

機関番号：12611

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20530623

研究課題名（和文） パッケージツールと支援サイトによる日本型スクールカウンセラーの学校全体への支援

研究課題名（英文） Facilitating Whole School Collaboration by School Counselors via Packed Tools and a Supportive Web Site

研究代表者 伊藤 亜矢子 (ITO AYAKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：50271614

研究成果の概要（和文）：

本研究ではスクールカウンセラーの学校全体への支援を可能にするツールづくりを国際比較によって行うことを目的とした。米国、スコットランド、香港などの研究者・実践者との協議や現地調査、共同研究を行った結果、①学級を切り口に学校全体への支援を行うための学級風土質問紙小学校版の公開と、中学校版も含めた自動分析システムの構築、②子どもの肯定的資質をアセスメントする質問紙の作成試行、③SC と教師の協働を促進する教師向けパンフレット、テキスト作成、④支援サイト試行などを行えた（一部継続中）。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to develop effective tools and a support site for school counselors to collaborate with teachers in the general (whole school) environment. The study included field researchers and practitioners from the USA, Scotland, and Hong Kong. Tools developed as part of this project were as follows: (a) The Classroom Climate Inventory (CCI) elementary version was published and an automatic analysis system for the CCI was developed, (b) A Japanese version of the Adolescent Co-vitality Scale in was created and administered, (c) A pamphlet for teachers explaining how to collaborate with school counselors was created and the text for school counselors was written, (d) A tentative web-based support site was created and operationalized.

交付決定額

（金額単位：円）

|         | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|---------|-----------|-----------|-----------|
| 2008 年度 | 1,500,000 | 450,000   | 1,950,000 |
| 2009 年度 | 1,000,000 | 300,000   | 1,300,000 |
| 2010 年度 | 1,000,000 | 300,000   | 1,300,000 |
| 総計      | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |

研究分野：学校臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：スクールカウンセリング 学校支援 学級風土 心理教育 コンサルテーション

## 1. 研究開始当初の背景

スクールカウンセラー（以下 SC）の中学校への全校配置も進み、日本型 SC のあり方や成果が問われている。不登校・いじめはもちろん、特別支援教育やキャリア教育など学校全体が SC と協働するニーズが増加してきた。しかし現状では、非常勤心理職である SC が、

学校・教師に学校全体に関わる支援を提案するのは必ずしも容易でない。学校全体への支援のイメージを学校側にわかりよく伝え、ニーズ査定や支援立案、効果査定を行えるツールがあれば、SC からの提案・実践が行いやすくなり、SC 活動のアカウンタビリティや学校評価の面でも貢献できる。そこで本研究では、学校全体への支援の推進方法として、米国

MEASURE モデルと、スコットランドの非常勤心理職による学校全体への支援ツールを、日米・日英比較によって日本のツールと合わせて応用発展させることを考えた。

米国 SC 協会 (ASCA) による MEASURE モデル (Dahir & Stone, 2006 ; 井上, 2007) では、学校全体への包括的な支援を効率的に行うため、各校の「ニーズ査定」「学校全体への介入」「効果の評価」をシステムティックに行う方法がツール化され、初心の SC も活用しやすいと考えられる。しかし、MEASURE モデルは、学力向上を最終目的とし、常勤教育職である米国の SC システムを前提としている。メンタルヘルス中心で非常勤心理職の日本型 SC が応用するには、実践場面での検討と改良が必要である。

他方、スコットランドモデルでは、日本と同じ週 1 回程度外部から来る非常勤心理職が、学校全体への支援をメンタルヘルス中心に行っている (Scottish Executive, 2002)。しかも、学級風土アセスメントを含む全校型の支援をコンサルテーションによって行う連携ツールがパッケージ化され、支援サイトと共に活用されている。これは、米国型 SC よりも日本型 SC の実態に近く、特に、初心の SC でも活用できるパッケージツールの発想は今後日本でも有効と考えられた。

筆者はこれまで、学級風土アセスメントを用いたコンサルテーションの実用化に向けた研究および、学校内で活用できる包括的なアセスメントツールの開発を行ってきた。そこで本研究では、それらのツールに、MEASURE モデルの枠組みやスコットランドのパッケージツールの発想を応用し、初心・遠隔地の SC でも活用可能な日本型パッケージツールを作成することを目的とした。

## 2. 研究の目的

研究 I) 日本型 MEASURE の実施方法を検討する。

研究 II) スコットランドのモデルとツールを精査し、日本型のツールを考案する。

研究 III) 研究 I・II の成果を総合して、日本型パッケージツールとその活用方法を提供する支援サイト (サイト入力の学級風土アセスメントを含む) を作成する。

## 3. 研究の方法

研究 I) 創始者 Dahir 氏との研究交流および、日米の SC への面接調査、SC のフォーカス・グループ、中学校との共同実践を通して、MEASURE モデルの日本での実施可能性および

実施に必要な工夫・改善について検討する。

研究 II) スコットランドよりツールや資料を得て内容を検討する。主にスコットランド政府にあたる Scottish Executive 刊行の資料および Glasgow 地区の教育心理サービスで使用されている McLean, A 氏の Motivated School に関するパッケージツールについて精査し、日本で使用可能なツールについて検討する。

研究 III) サイト入力・自動分析による学級風土アセスメントシステムを開発し、研究 I・II の成果を総合した日本型のパッケージツールを作成する。その活用方法等を提供する支援サイトを作成する。

## 4. 研究成果

研究 I) MEASURE モデルについては、①SC の面接等により、日本の SC はいじめ不登校対策という認識が学校現場に根強く、まずは MEASURE モデルの M (Mission) となる学校の基本方針や潜在的な支援ニーズを学校と SC が共有することが現状では容易でないことが明らかになった。②そこで Fulbright 専門家プログラムにて、Dahir 氏を 2009 年 3-4 月に 2 週間招聘し、そうした現状も含む日本の学校状況等を協議し、それを踏まえたモデルの検討協議を行った。③それにより MEASURE モデル以前に、むしろその背景にある SC の役割や実践の工夫を、SC と学校が知ることが重要であると考え、米国の SC 教育改革の成果である Transformed School Counselor について、テキストの翻訳と共著の試み (進行中)、現役 SC のフォーカスグループによる学習と実践の試みを行った。④その結果、日本の SC 活動でも行える工夫は少なからずあり、それらを、MEASURE モデル等を参照した日本型の全校型支援モデルに位置づけることが有効である可能性が示唆された。⑤これらを踏まえて、香港・台湾・韓国・アイルランド・スコットランドとの比較検討も含めて、三次支援だけでなく一次支援・二次支援も視野にいったモデルの理論的検討を開始した (伊藤, 2010 ; 2011)。また、米国の知見からは、日本学術振興会短期招聘で 2010 年 10~12 月に招聘した Smith, D. 氏と共に、子どもの肯定的資質を捉えるツールとして Co-Vitality 尺度を訳出し 3 中学校で試行した (現在分析継続中)。

研究 II) スコットランドのモデルとツールについては、2010 年夏まで現地との連絡等がうまく行かずだったが、その間に交流機会のあった香港のモデルを検討した。

香港については視察と教育局担当者との研究協議により、行政・大学・地域資源の協

働により、健康な社会を担う市民の育成を目標とした包括的なガイダンスモデルが作成実施されていた。主な担い手としてガイダンス教師が育成され、加えて中学校レベルではソーシャルワーカーが支援に当たっていた。各教科の教材として使用可能な心理教育教材（いじめ予防のためのいじめられた子の心理を考える国語教材など）が開発されていた（伊藤, 2010）。

また 2010 年夏の国際学校心理学会（於アイルランド共和国）参加を契機に、以後スコットランドのツール作成者 McLean 氏らと研究交流を円滑に行うことができ資料収集と検討が進んだ（伊藤, 2011）。McLean 氏のツールには、学級風土質問紙の他、教師の信念や子どもたちの教師観等についてのアセスメントツール、教師や子どもの省察を深めるワークシート等が含まれており、子どもの性格特性や学級風土に合わせて、子どもの学習意欲を養う 3 要素（所属感・有能感・自律感（自主性））を高める工夫を教師自身が見いだせるよう構成されていた。このことより、従来は学級風土アセスメント結果の提示による教師の洞察を重視してきた学級風土コンサルテーションにおいても、教師の省察を深めるワークシートなどを開発する必要性が示唆された。

研究Ⅲ ツールについては、①小学校版学級風土質問紙（伊藤, 2009）とその活用事例（Smith, Furlong, & Ito, 2010; Ito in press）を国内外で公表した。②中学校版学級風土質問紙の活用として、学級風土質問紙によるアセスメントに基づく心理教育実践とその方法を公表した（伊藤, 印刷中; 伊藤・中根・鈴木, 2009; 中根・鈴木・伊藤, 2010; 鈴木・伊藤・中根, 2011 発表確定）。③DVD 作成については準備を進めてきたが、SC フォーカスグループでの実践等から、現状では短時間で配布検討できるイラスト版の小冊子の方が DVD より有用と考えられた。そこで、教員研修等での実践知も含めて SC の学校全体への支援について教師向けに解説したカラー版イラスト入り小冊子を DTP にて作成・印刷した後、より広く配布できるよう出版社より公刊することとした（伊藤, 印刷中）。

サイトについては、サイト運用の実務的問題から公開はかなっていないが、フォーカスグループでの試行を行った。また、後の公開等に向けたツール作成として、学級風土質問紙の入力システムを国立教育政策研究所との共同研究で試作・試行した。ただし、サイト入力については、同時に学校の PC 室を 1 学級以上使用できないことから、利便性等に制限があること、同時に多数の学級実施を可能にするソフトは開発費が非常に高額になることなどがわかり、検討を継続することとした。

また、学級風土質問紙小学校版の自動分析システムを新たに作成し、同中学校版についても従来のシステムを大幅に改め、より簡便に作成できる最新版を作成した。暫定版ソフトにより、東京近郊某市教育委員会との共同で、小学校 115 校・中学校 51 校での学級風土質問紙を実施しソフトの実践的運用とそれによる活用を検討した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 26 件）

[1] Avako Ito (2011) 『Enhancing school connectedness in Japan: The role of home room teachers in establishing a positive classroom climate』Asian Journal of Counselling 18 巻（掲載決定済み・査読有）

[2] 伊藤亜矢子 (2011) 『全校型支援のヒント: スコットランド・アイルランドの実践に学ぶ』子どもと学校臨床第 4 号, pp113-120

[3] 伊藤亜矢子 (2011) 『【特集】不登校を出さない学級づくり「早期発見・早期対応のためのアセスメント」』児童心理臨時増刊 6 月号, pp124-129

[4] 伊藤亜矢子 (2011) 『スクールカウンセラーは学級崩壊にどう対応できるか』教育と医学 (7 月号) (印刷中)

[5] 伊藤亜矢子 (2011) 『心理教育に挑戦—アンガーマネジメントの試み』子どもと学校臨床第 5 (8 月号) (印刷中)

[6] Smith, D. C., Ito, A., Gruenewald, J., Yeh, H. (2010)

『Promoting School Engagement: Attitudes Toward School Among American and Japanese Youth』Journal of School Violence, 9(4), pp392-406. 査読有

[7] 伊藤亜矢子 (2010) 『香港の包括的ガイダンスプログラムについて—Brian Lee 氏の講演から—』2010 年香港・台湾スクールカウンセリング研修旅行報告書—学校現場・大学・行政の三者間連携を模索する—, pp111-113

[8] 伊藤亜矢子 (2010) 『学級・学校のアセスメントと対人関係スキル・トレーニング』児童心理 10 月号, pp93-97

[9] Smith, D., Furlong, M., & Ito, A. (2010)

『A cross-national comparison of positive psychological dispositions and mental health』32<sup>nd</sup> International School Psychology Association Conference, 29. 査読有

[10] 伊藤亜矢子 (2010) 『通常の学級で「特別支援教育」をどう進めるか—特別なニーズのある児童生徒の支援のための学級・授業作りの実践を考える—「学級風土からみた特別支援」』LD 研究 19(1), pp10-12. 査読有

[11]伊藤亜矢子(2010)『全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討①』日本教育心理学会第52回大会, 721.

[12]伊藤亜矢子(2010)『全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討②-スクールカウンセラーの役割を中心に-』日本心理臨床学会第29回秋季大会発表論文集, 353.

[13]中根由香子・伊藤亜矢子・鈴木水季(2010)『学校全体への予防的支援を促進する心理教育プログラム作成の試み②-学校のニーズに応じたシナリオ教材の作成-』日本心理臨床学会第29回秋季大会発表論文集, 533.

[14]井梅由美子・青木紀久代(2010)『中学生の対象関係と精神的健康』心理臨床学研究27(6), pp738-743. 査読有

[15]伊藤亜矢子(2009)『小学生用短縮版学級風土質問紙の作成と活用』コミュニティ心理学研究, 12(2), pp155-169. 査読有.

[16]伊藤亜矢子(2009)『学校・学級組織へのコンサルテーション (IV 教育心理学と実践活動)』教育心理学年報, 48, pp192-202. 査読有

[17]伊藤亜矢子(2009)『学級アセスメントの具体的な進め方』児童心理, 63(6), pp78-82.

[18]伊藤亜矢子・中根由香子・鈴木水季(2009)『学校全体への予防的支援を促進する心理教育プログラム作成の試み①』日本心理臨床学会第28回秋季大会発表論文集, 328.

[19]伊藤亜矢子・岡崎琴恵・石田素子(2009)『エンパワーメント評価とGetting to Outcomesの日本での応用可能性についての一検討: Dr. Wandersman講演を基礎として』お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, pp65-74

[20]伊藤亜矢子(2009)『学級風土オンライン回答システム構築の試み』国立教育政策研究所平成20年度重点配分経費による研究報告書 学級風土と学校文化に関する研究, pp1-6

[21]伊藤亜矢子(2009)『学級アセスメントの具体的な進め方』児童心理4月号, pp78-82

[22]伊藤亜矢子(2008)『格差のなかで…子どもたちの育ちに大人が支援できること』少年のみちびき20(2), pp3-6

[23]伊藤亜矢子(2008)『学校臨床から見た“格差社会”に隠されるニーズ』青少年問題630, pp8-13

[24]伊藤亜矢子(2008)『メンタルヘルスを支える地域ネットワークづくり』児童心理, 62(9), 156-162.

[25]大関健道・蘭千壽・鎌原雅彦・伊藤亜矢子(2008)『「学び合い学習」の導入が児童生徒の学習態度、学習集団形成と教師集団に及ぼす効果の検討』協同と教育4, pp12-22. 査読有

[26]駒田優子・中根由香子・伊藤亜矢子(2008)『中学校における教師とスクールカウンセラーの協働を促進する手だての模索(1) スクールカウンセラーは教師と異なる視点をいかに提示すべきか』日本教育心理学会総会発表論文集, 50, 129.

[学会発表] (計25件)

[1]鈴木水季・伊藤亜矢子・中根由香子(2011/9) (予定) 『学校全体への予防的支援を促進する心理教育プログラム作成の試み-SCの実践に心理教育をどう活かせるか-』日本心理臨床学会第30回秋季大会, 福岡国際会議場他

[2]北澤南海・伊藤亜矢子(2011/7) (予定) 『小学校における授業観察と学級風土質問紙の照合一教師の指導行動に着目して-』日本コミュニティ心理学会第14回大会, 上智大学

[3]伊藤亜矢子(2011/7) (予定) 『全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討③-学級をベースにした全校型支援の可能性-』日本コミュニティ心理学会第14回大会, 上智大学

[4]中根由香子・伊藤亜矢子(2011/7) (予定) 『教師とSCの協働による心理教育プログラム実施における配慮事項-教師からの要請やコメントに着目して-』日本コミュニティ心理学会第14回大会, 上智大学

[5]伊藤亜矢子(2011/2/11) 『学級風土のアセスメントとコンサルテーション』日本学校心理学会第32回研修会, 聖徳大学

[6]伊藤亜矢子(2010/9/5) 『全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討②-スクールカウンセラーの役割を中心に-』日本心理臨床学会第29回秋季大会, 東北大学

[7]中根由香子・伊藤亜矢子・鈴木水季(2010/9/4) 『学校全体への予防的支援を促進する心理教育プログラム作成の試み②-学校のニーズに応じたシナリオ教材の作成-』日本心理臨床学会第29回秋季大会, 東北大学

[8]伊藤亜矢子(2010/8/29) 『全校型支援を行うスクールカウンセリングの理論的検討①-全校型支援をめぐる現状と課題-』日本教育心理学会第52回大会, 早稲田大学

[9]大野精一・金山健一・伊藤亜矢子・西山久子・横島義昭・石隈利紀・今西一仁(2010/8/28) 『(自主シンポジウム) 香港・台湾・日本の包括的スクールカウンセリングから学ぶ(話題提供者)』日本教育心理学会第52回大会, 早稲田大学

[10]伊藤亜矢子(2010/8/4) 『改めて学校教育相談を考える~学校ならではの支援~』日本学校教育相談学会第22回総会, 研究大会(神奈川大会)日本学校教育相談学会, 鎌倉学園

[11]Smith, D., Furlong, M., & Ito, A. (2010/7/24) 『A cross-national comparison

of positive psychological dispositions and mental health』32<sup>nd</sup> International School Psychology Association Conference, 29. Trinity College Dublin.

[12] 伊藤亜矢子・河崎友里(2010/7/18)

『小学生の「感謝」とソーシャルサポートについての研究』日本コミュニティ心理学会第13回大会, 立教大学

[13] 花熊 暁・伊藤亜矢子・松久真実・横井久美香・浦野裕司・樋口一宗(2009/10/11)

『通常の学校で「特別支援教育」をどう進めるか(話題提供者)』日本LD学会, 東京学芸大学

[14] 伊藤亜矢子・中根由香子・鈴木水季(2009/9/20)『学校全体への予防的支援を促進する心理教育プログラム作成の試み①—学級風土アセスメントから見えてきた支援ニーズをもとに—』日本心理臨床学会, 東京国際フォーラム

[15] Ikeda, Kotoe, Ikeda, Mitsuru, & Ito, Ayako (2009/6/20) 『Application of getting to outcomes for school evaluation in Japan』 Society for community research and Action, Montclair University in New Jersey

[16] 伊藤亜矢子(2008/10/13) 『子どもの学びを支援する地域と学校のネットワークづくり(その1) 授業からコミュニティ・ネットワークへ』日本教育心理学会第50回総会, 東京学芸大学

[17] 岡崎琴恵・池田満・伊藤亜矢子(2008/10/13) 『教師のエンパワーメントを促進する学校職場環境の構築に向けて①バーンアウト予防のための職場環境要因の分析』日本教育心理学会第50回総会, 東京学芸大学

[18] 鶴川香奈・岡崎琴恵・伊藤亜矢子(2008/10/13) 『教師のエンパワーメントを促進する学校職場環境の構築に向けて②インタビュー調査を通じた教師の職場環境認知の分析』日本教育心理学会第50回総会, 東京学芸大学

[19] 伊藤亜矢子(2008/10/12) 『大学における学校心理学・学校臨床心理学教育の在り方をめぐって院生の実践力を育てる試み』日本教育心理学会第50回総会, 東京学芸大学

[20] 伊藤亜矢子(2008/10/11) 『マルチレベル分析の必要性』日本教育心理学会第50回総会 東京学芸大学

[21] 駒田優子・中根由香子・伊藤亜矢子(2008/10/11) 『中学校における教師とスクールカウンセラーの協働を促進する手だての模索①スクールカウンセラーは教師と異なる視点をいかに提示すべきか』日本教育心理学会第50回総会, 東京学芸大学

[22] 中根由香子・駒田優子・伊藤亜矢子(2008/10/11) 『中学校における教師とスクールカウンセラーの協働を促進する手だての模索②中学生を対象とした感情への気づき

を促すワークシート考案の試み』日本教育心理学会第50回総会, 東京学芸大学

[23] 岡崎琴恵・池田満・伊藤亜矢子(2008/9/15) 『学校教職員による自立的学校改善を促進するためのエンパワーメント評価の応用可能性』日本応用心理学会第75回総会, 横浜国立大学

[24] 伊藤亜矢子(2008/9/5) 『学校をエンパワーする実践研究—ツールの活用を通して—学校という場を生かした支援に向けて学級風土質問紙の作成と学級風土コンサルテーションの試み』日本心理臨床学会第27回大会, つくば国際会議場

[25] 青木紀久代(2008/9/5) 『学校をエンパワーする実践研究—ツールの活用を通して—』日本心理臨床学会第27回大会 つくば国際会議場

〔図書〕(計11件)

[1] 伊藤亜矢子(2011) ぎょうせい『カウンセリング・テクニックで高める「教師力」第1巻5章2節 学級風土質問紙』(印刷中)

[2] 伊藤亜矢子(編著)(2011) ミネルヴァ書房『エピソードでつかむ児童心理学』, 総頁280

[3] 伊藤亜矢子(2011) 金剛出版『子どもの臨床心理アセスメント: 子ども・家族・学校支援のために—第6章 学校環境のアセスメント』, pp126-131

[4] 伊藤亜矢子(2011) 放送大学教育振興会『児童・生徒指導の理論と実践—第2章 児童期・青年期の心理的特徴』, pp28-43

[5] 伊藤亜矢子(2011) 放送大学教育振興会『児童・生徒指導の理論と実践—第6章 児童・生徒指導と教師集団の組織的対応』, pp96-109

[6] 伊藤亜矢子(2011) 放送大学教育振興会『児童・生徒指導の理論と実践—第8章 子どもの心の健康と指導～不登校を中心に～』, pp120-137

[7] 伊藤亜矢子(2011) 放送大学教育振興会『児童・生徒指導の理論と実践—第11章 児童・生徒指導と教育相談』, pp166-179

[8] 伊藤亜矢子(2011) 東京法規出版『スクールカウンセラー活用のアイデア』, 総頁14

[9] 伊藤亜矢子(2010) 金剛出版『第6章 学校環境のアセスメント』松本真理子・金子一史(編)子どもの臨床心理アセスメント: 子ども・家族・学校支援のために, pp126-131

[10] 伊藤亜矢子(2009) 北樹出版『[改訂] 学校臨床心理学～学校という場を生かした支援～』, 総頁164

[11] 伊藤亜矢子(2009) 『心理アセスメント—思春期・青年期スクールカウンセリング』こころの科学別冊「実践心理アセスメント」 pp88-93

〔その他〕

○ホームページ等

伊藤亜矢子研究室

<http://itoayako.web.fc2.com/index.html>

○アウトリーチ活動情報

[1]伊藤亜矢子(2010)平成22年度特別支援教育コーディネーター研修会(第5回)『学級アセスメントと支援についてA区教育委員会学校教育部』

[2]伊藤亜矢子(2010)支援教育推進研修講座2『学校におけるコンサルテーションの実際』B県立総合教育センター

[3]伊藤亜矢子(2009)平成21年度15年次研修会『学級風土から考える学級作り, 学校作り』学校法人C学院

[4]伊藤亜矢子(2009)学年主任研修『「学級風土」を考える—学級風土質問紙と学校臨床心理学—』D市教育総合センター

[5]伊藤亜矢子(2009)平成21年度E市小中学校3年目経験者校外研修『学級アセスメントを用いた学級支援』E市教育研究所

[6]伊藤亜矢子(2009)校内研修『学級風土の研究について』F区立G中学校

[7]伊藤亜矢子(2009)平成21年度教育相談部会総会・春季研究協議会『学級風土を通して見えてくるもの～生徒の学級集団見立てと教師による支援の方法について～』H県高等学校教育研究会教育相談部会

[8]伊藤亜矢子(2008)I教研定例会『学級風土の見立てについて』I教研松戸支部教育相談部会

[9]伊藤亜矢子(2008)平成20年度E市小中学校3年目経験者校外研修『学級アセスメントを用いた学級支援』E市教育研究所

等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊藤 亜矢子 (ITO AYAKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：50271614

### (2) 研究分担者

青木 紀久代 (AOKI KIKUYO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：10254129